

て官憲の命を以て肉身佛の破壊せられたる一例あり。而して此の事實はかくの如きの一例を供するのみならず亦以て支那の官人の佛教に關係ある何物をも蔑視するを知るべく、且は地方に於ける異教の運命は、一に懸りて其の地方の官吏の宗教的傾向如何に在るを知るべし。

上海の支那街の西門外に一寺あり。西方庵といふ。光緒二十一年、寺僧容空死せしかば、之を缸に納めおきしに、三年にして其の身亡びず。乃ち假漆と鑛金とを施して、之を寺内に安ず。時に群民爭ひ來りて之を觀んとし、或は香を燒かんと欲するものあり、大に雜鬧を極めしかば、數日の後警吏の干涉する所となり、暴民嘯起の恐なさに非ずとて、乾佛の燒毀を命ぜられたり。

(池内 宏)

## 中央亞細亞探檢の近況

Central Asia, by J. H. Parker, (The Imperial and

Asiatic Quarterly Review and Oriental and Colonial Record. Vol. XXXI. No. 61. January, 1911)

英國の學術界は中央亞細亞に於ける言語學的、人類學的方面の探檢に就いて、未だ一般學者の熱心なる唱道なく又深き興味を喚起せるもの極めて少なきの觀あり。予は今茲に英佛等の諸國の東洋學者が最近の、中央亞細亞に於ける探檢の概況を述べ、以つて一般學者が今少しく中央亞細亞研究に就いて興味を有するに至らんことを希ふものなり。

見るべし。スタイン (M. Aurel Stein) 博士が一九〇七年、印度總督の依頼により中央亞細亞に入り于闐に支那古記録を發見し、昔、マルコ・ポーロ (Marco Polo) が所謂サツチウル (Sachinur) 即ち燉煌の附近に於いて考古資料の一大發掘を行ひたるあり。又その翌、一九〇八年、佛人ペリョ (M. Paul Pelliot) がスタインのあとを襲ひ同じく中央亞細亞の探檢に従事したるあり。共に孰れも支那に於ける稀有の古寫經

外種々の貴重なる珍品を獲て歸りたるものなり。凡そ世界文明史の闡明は多く大規模の發掘事業の後に在りて存す。墓碑、燒物類其の他各種の考古資料に一つとして古代文明の或る方面を告ぐるの材料とならざるものなし。ランケスター(Sir Ray Lankester)の言に據れば人類は今より五千年の昔、既に或る程度の文明を有し、巧に骨面に彫刻を施し、今日の世界に見ること能はざる五蹄の馬を飼ひ馴らし、その他牛馬豕羊の家畜を社會的經濟的目的に利用する方法を會得し居たりしもの如しと。蓋しこは後世諸地方の土中より發掘せらるゝ遺物によりて推測せらるゝものなり。從來發掘せられたる總べての物の中にその古さを考ふる時は今を去る八千年前のものを以つて最古のものとなし、祈禱、呪詛の形式その他簡單なる記號的のものの中には又、極めて元始的形式の俤と見らるべきものがあるが如きも其の他は殆んど據るに由なし。總じて上代文明の俤を幾分な

りとも精密の點迄吾人に告ぐる史料を得んとには是非とも記録的のもの、の發見に俟たざる可からず。上代の人類が遺せし記録又は刻文は以つて彼れ等が兎も角も記述するに足るべきものとして認めたる事柄を記せるものなる可く吾人は之によりて上古の社會的發達のさまをも幾分窺ひ知ることを得べけん。

支那はその文明の發源頗る遠く、考古學的研究の對象としては最も恰好の古國なり。今その支那民族對印度、支那、西藏の側のとほ暫くおき、支那民族對北方、又は西方外民族との交渉史の概要について先づ通覽すべし。支那は由來いづれの時代に於いても東、北、西の諸方面より騎馬遊牧種族の侵入壓迫を受けざるゝとなく而しその種族は之を精密に見れば各種の種族を包含せるならんも、若し世界人種を羅甸族、チュートン族、ニグロ族、アメリカ印度族などの大體に區別する時はかの侵入種族は即ちトルコ族(Turkic)とも概稱し得べきか。(譯者曰ふバーカーは未

だ白鳥博士の匈奴蒙古族説を讀まざるならん）而して此の騎馬侵入種族は猶スキイテン（Scythian）族が希臘人波斯人等に於ける關係と同じく甚しく支那民族に恐怖の念を抱かしめたり。而してかれ等騎馬族は亞細亞北部一體の地域に擴かり居り、東は朝鮮半島より西は露西亞大平原に至る。人口約五百萬を算しそのうち武裝騎士とも稱す可きは五十萬を下らざりしなるべし。かれ等は武に長じ日常遊牧を事とし天幕生活を營み其不動産とも稱すべきかれ等の財産は牧畜に缺く可からざる牧場及び水なりしが如し。

支那青史の上にトルコ族の始めて現はれたるは西紀六世紀のことに屬す。トルコ族は匈奴の一分派にして、東方の地より水草を追うて西漸し土都コンスタンチノープル（Constantinople）方面に迄ても進めり。茲に謂へるトルコ族とは嚴密なる意味に於けるチュルク族の謂に非ず、たゞ便宜上の稱呼に過ぎざるものと知られたし。トルコ族の史實は最近此の二

十年間に於いて對譯トルコ碑文の發見ありて以來これに關聯せる支那方面の史實と共に闡明せられしもの頗る多く支那史籍に見ゆるとがらにして是認せられたるものも亦多かりき。實に突厥の碑の發見は近時東洋史界に於て頗る重要視す可きものとす。今次スタイン及びペリオ兩氏が獲得せし發掘物が支那の史實に多大の貢獻をなし、殆んど過去一千年間土中に埋没せられしこれ等の記録によりて吾人は更に新事實を確め得ると幾何なるを知らず此の二大發見の事實は共に東洋學史上に特筆すべきとなりとす。かのラドロフ（Radloff）及トムセン（Thomsen）が古代トルコ語の多くを再成せしめ得たるが如き又トルコ族の三四百年間以上の史實を探ぐり得たることの如き、突厥碑の發見にその緒を開き得たるもの少なしとせず、知らず、中央亞細亞の今次の發掘物はその研究結果によりて更に如何なる事實を生じ來べきか、かく發掘の結果が學界に多大の貢獻をなし、學術の

進歩を促すあるを見る時は發掘探檢の事業は今後一層推獎す可きものならずとせんや。

近時かのブッセル (S. W. Bushell) 博士がヴィクトリア博物館 (Victoria and Albert Museum) に保管を依頼せし珍彝器の銘は金石家としての端方の言によれば、眞に歴史的價值を有し、埃及及バビロニア (Babylonia) の刻文とその史的價值相軒輊すのことにして、尙その銘に見ゆる事實は支那の青史に相聯關し、併せて茲に概説しつつあるトルコ族の支那侵入のことに關せるものなり。(譯者曰ふ或はこれ號季子伯磐銘の如く上代の獵狄に關する如きものには非ざるか)。頃者支那諸地方、鑛山の探掘、鐵道工事の頻繁なることなどにより土中偶、古陶器の如き古銅器の如き類の考古資料の頻りに發掘せらるゝあり。かゝる副産物的の發掘の外に支那政府又は或る學會は進んでかゝる考古資料保存の必要を切實に感じ年々、新資料發掘の隆盛を見るに至れり。

翻つて今中央亞細亞探檢の過去を顧るに中亞探檢のことたる近年突如として起りしものに非ず。今より既に八十年前匈牙利人アレックス、クソヤ (Alex Osoma) なる人、もとケレス (Koros) の生れるがその種族マジヤール (Magyar) の本源地を發見せんとしてはるばる高部亞細亞地方に探檢を試みたる所ありたり。されど探檢に於いてかれは効果を擧ぐると能はざりしもその跋涉巡歷の中に西藏語の語彙を又また蒐集して一の西藏辭典を成すことを得たりと云ふ。さてマジヤールの名の支那の文獻上に現はれしは西紀十三世紀の頃なりとす。馬察耳これより。歐洲にては中世の頃 Hunnen にちなめる諸種族、Alans, Cherkess、その他の名にて知らる。クソマと列びて中亞探檢上に有名なる匈牙利人はネマチ、カルマン (M. Nemati Kálmán) なりとす。ネマチは探檢について非常なる熱心家にして精力絶倫、又非常なる名聲を有し俗にはコロマン、ネメチ (M. Koloman Nem-

oiti)の名にて天下に知らる。ネメチは匈牙利人の祖先をば匈奴、スキヤテン(Scythian)フウニ(Fanni)即ちデモン(Daemon)ハン(Hun)土耳其人及び蒙古人等と同種のものに歸せり。即ち太古の時代以來タニユーフ河Danubeの流域より鴨綠江Yaluにかけての歐亞北半の一體の地にひろがれるトルコ族即ちトルコイド(Torkoid)民族より出てたりとせるなり。ネメチは嘗にマジャールをトルコ族に歸せしのみならず、歐洲の中世史に現はれたるハン(Hun)族も亦トルコ族となせり。ハン族は支那匈奴の六世紀以後に現はれたるものにして騎馬生活をなせる遊牧種族たり。かれ等は平生同種的關係にて一二萬の土民互に相氣脈を通じて結合をなすことあるも、その一旦迅雷の勢を以つて席卷し來たる剛者の現はるゝあれば、忽ちにして之に附従す。されどその酋長の統一の實力の衰ふるあらば、遊牧種族は又離散して各その好む方角に向つて水草を追ふて移住す。その多く

は西へ西へと移り行きて新牧場をその好む地點に卜するを例となせるが、インドスキヤテン族なるアブダル(Abdal)人の如き、又アフガニスタン(Afghanistan)に於ける先住民バルチア(Partia)人の如き、又蒙古種なる鮮卑族即ち烏丸の如き、又ココノール(Kokonor)地方に移住して西藏、トルコ、蒙古の諸部族を併吞せしタングート(Tangut)の如き(成吉思汗之を併吞す)その他、ウキグルトルコ(Orkhour Turks)の如き、又支那北部を一統せし蒙古族の契丹即ちカタヤ(Cathaya)の如き、(露西亞語にて支那をキタヤと云へるは契丹の名を轉用せしものなり)、その他契丹を逐ひて其の復讐を純蒙古人より受けたる女眞即ちマルコボロの所謂チオルチア(Ciorotia)又はチオルチヤ(Chorotia)の如き此れ等の諸族が代る代る支那北邊に現れたるは最も注目す可きことなり。蒙古元朝亡びて一時は騎馬遊牧種族はその勢を潜め居たりしが間もなくジュチ族即ち滿洲(愛親覺

羅氏) 現はれて此の二百五十年間全支那の實權と  
れり。

以上略述せる所は支那の政治史上に現はるゝ最も  
有名なる種族なり。支那史籍にて尙左まで名もなき  
小部族亦頗る多し。その小部族はまゝ西人の書ける  
史籍上に現はるゝことあるもその名稱は彼我必しも  
一致せず。アラン族(Alan)即ちエーズ族(Aze)の如  
き又馬察兒族即ち匈牙利の如きフィン(Finn)ラップ  
(Lapp)に言語上關係あるカザールトルコ(Khazar  
Turk)を始めとし、又アヴァール族などあり、Avarと  
記されたり。アヴァール族はトルコ種のモンゴリア人  
(Turko-Mongoloid)にして、西紀五六八年バンノニ  
アを侵せし後全歐に侵入せし種族なり。普通こは支  
那に所謂芮芮即ち蠕蠕として知られたるものなりと  
せられ居るも恐らく然らずして、アヴァールは Yü-  
hpan 即ち Yehun なり、つまり Yehun は Abar の音  
をうつせるものにして Abar と訛られたるもの。そ

の Yehun とは即ち支那匈奴の最後の汗の名にして、  
かの波斯及トルコ人がエプタリト(Ephthalite)國  
を亡ぼせし當時既に宛かも西域に於いてその存在を  
失ひ爾來アヴァールの名は史上に見えざることゝなれ  
り。(譯者曰ふ、白鳥博士の講義によれば Avar とは  
辮髪を呼ぶツングース語にして、アヴァール人は即ち  
蠕蠕即ち蒙古族なりと云ふ可きかと)。支那東方北方  
及び西方に於ける諸種族のことは大略以上の如し。

閑話休題。最近中亞探検家として名聲噴々たるベ  
リオ氏の云ふ所によれば一八八九年ボウワー(Bow-  
per)大尉は中亞クチャリ(Kuchari)に於いて印度經典  
を購ひ得たりと。その後數年を出でずしてグレンナル  
ド(M. Grenard)は當時知られたるすべての印度經  
典を手闕に得たり。又カシユガル(Kashgar)の露  
國領事ペトロフスキ(Petrovski)も近時探検して多  
くの古記録を得て歸れり。尙かのスタイン(M. Stein  
及びスモンヘデン(Sven Hedin)が巨多の貴重なる

考古資料を于闐及びタクラマカン (Takla-makan) の探検にて發見し得たることは全世界の人々の耳目に尙新たなることなり。露西亞に於いては一八九七年セントピータースバークに於てクレメンツ (M. Klementz) を會長に考古學會を組織して中亞の探検を試み多量の古記録をツルファン (Turfan) に得たるありその古記録中カラバルガサン (Kara-balgasan) のトルコ對譯碑文の如き貴重なるものあり。尙南歐伊太利に於いては一九〇〇年羅馬に東洋學會の設立あり列國聯合中亞探檢の舉は企てられ一九〇二年遂にハンブルグ (Hamburg) に於ける總會の決議を経て探檢隊は派遣せられたり。此の探檢隊と前後して印度總督府にはスタイン (M. Aurel Stein) に囑して大規模の探檢をなし遂げて大功を奏せしあり。獨乙に於いては一九〇二年グリュンウエデル (Grünwedel) 教授がツルファン探檢の途に向ひしクレメンツ (Klementz) 博士の後を襲ひたるあり而してすべて此等の

探檢事業の大成は佛蘭西のルノック (M. von Leaoq) によりて成されたり。かくして印度、ソグド (Sogdian) トルコ、マンチア (Manichean) の古記録は非常に多く發掘せられたり。爾後一九〇六年夏ペリオ (M. Paul Pelliot) は巴里を出て中央亞細亞に向ひ、嘗つてグリュンウエデル (Grünwedel) 及びベレゾフスキ (Berezowski) のとりし路をとりて分け入れり。コロンビア大學のラウフマン (Berthold Laufer) は此の行に加はり居れり。

かくの如く中央亞細亞探檢事業は頻々として行はれたりしがスタイン及びペリオが、敦煌及びその千佛洞に得たる巨多の寫經その他古代藝術資料は最も特筆すべきものなりとす。殊にペリオの探檢は一九〇八年に於いて行はれ彫刻、繪畫、記錄の西記六〇〇年より一二〇〇年にかけての珍物約八十函は大荷物として巴里に持ち歸られたり、痛快なる次第と云ふべし。尙最近に一九一〇年露國の學士院會員オル

デンブルグ(S. F. Oldenburg)は探検隊の引率者としてツルファンの泉地、ハラシャール(Harshar)クチェー(Kucher)の地をあさりこれ亦多大の價值ある資料を獲て歸國せりと云ふ。

又英人ヤングハズバンド(Youngusband)大佐はブルース(Bruce)少佐と共にマルコボロが昔巡歴せし地域の大部分を跋渉し、又タイムス新聞通信員モリソン(Morrison)博士は昔のトルコ、ウギグル・マニチエル(Origour-Manichean)諸族に關係ある河南、西安の諸府を始め甘肅省にては獨乙人が黃河架橋中蘭州府即ちトルコ人の昔のウルムチ(Urnuiti)その他アクス(Aksu)カシガール(Kashgar)の地その他涼州(Ergunul)甘州(Canachou)肅州(Sueichu)敦煌(Sacuin)などを経て歸れり。モリソンはかくてその途に敦煌は過ぎりたりしも千佛洞は之を訪はざりしと云へり。ブルース少佐も敦煌を過ぎりて千佛洞は之を知らずして行きすぎたりと。假令モ

リソン及びブルースが千佛洞を訪ひたりとするも洞の管主道僧汪某が千年以前の古記録はすべてスタイン及びベリオの兩氏に賣却し去りたる後のことなれば、さしたるものありとも覺えず。尙當年に入りては昨今エサートン(Eherton)中尉が中央亞細亞探検を試みつゝあり。その歸途や流石に尙貴金資料を贏得もたらすならん。

今日迄の中央亞細亞探検概況は實に以上の如し、從來考古資料を得たるもの決して少なしとせざるも尙その勝れるもの幾何あるをしらず、もし今後英國よりも更に新獨立的中亞探検隊を組織し派遣せんとする時は、吾人は切にチマチ(M. Nemati)をしてその局に當らしむ可きを望まざんばあらず。こは英政府、東洋學會、地學協會等一切に望む所なり。尙又匈牙利政府がその種族の根源をたしかめ、その發源地、その順路を學術的に探検せんと欲する時に於いても亦その事業をチマチその人にはかる可きな



り。チマチ氏は身心共に活動的にして克己心に富み且つ根氣絶倫、タクラマカンの砂漠の沙を滋養として迄もその探檢の功を奏せんとするの概ある人なり。かれが研究的精神の旺盛なるはかつてトルコスキアテ族の歴史上の諸事項を解決せし時のことを以つてその一斑を推して知らる。尙米人の旅行家として有名なるゼイル (W. Eagar Geil) 博士は支那各地の都市を踏査し了りて今倫敦に來り居れり。もし博士にして更に進んで中亞探檢に多大の興味を有しその精力を傾注するに至らんか、ゼイル博士と、チマチとの史的探檢によりて中央亞細亞は世界の學術界に向つて更に一層大なる考古祕庫として認めらるゝに至ること期して俟つべし。

(後藤朝太郎譯)